★☆★2021 富士宮地区労福協★☆★

役員視察研修の報告

■視察研修の目的

エネルギー問題の今昔を通じて、労働者の闘争や権利獲得に向けた歴史を振り返るとともに、行政、産業、民間連携による次世代のエネルギー資源の開発の最前線に触れることで知見を広め、労福協としての行政への意見反映等に役立てていく。

■視察日程と参加者

◇2021 年 12 月 19 日（日）～20 日（月）の 2 日間

◇富士宮地区労福協役員 6 名

■視察行程

◇12 月 19 日（日）

世界文化遺産　三池炭鉱（宮原坑、旧長崎税関三池税関支署、三池港、三川坑）

◇12 月 20 日（月）

北九州市エコタウンセンター（北九州次世代エネルギーパーク）

※研修施設がエコタウンセンター、エコタウンセンターを含むエネルギー集積地全体が次世代エネルギーパーク

■参加役員から研修を終えての感想

富士宮地区労福協役職	所属団体・役職	氏名
会　長	テルモ労働組合・中央執行委員長	小林　純一

●明治日本の産業革命遺産を視察（宮原第二竪坑、旧三池税関支署、三池港、与論長屋）

宮原坑では、明治後期の国家事業として、富国強兵の考え方の中、石炭採掘が主たる日本の輸出産業として、石炭埋蔵量が豊富であり、尚且つ港が近くにある三池炭鉱が発展した経緯を知る。宮原坑跡は、石炭採掘で発生する地下水を汲み上げ地上に排出する為の設備の一部が、現在残されているものであった。今でも地下に十分に石炭が大量に埋蔵されているが、海外のコスト安の石炭の影響を受け 90 年前に閉坑していた。目立つ建屋としては、第二竪坑が目に止まる。その脇に、地下から人や石炭を引き上げる、巻揚機室が辛うじて存在している状況であった。この世界遺産を視察し、当時の国家政策の結果として、現在の経済大国日本を築き上げるきっかけとなった事業の後地であり、歴史的な価値のある建屋であることは理解できる。しかし、この世界遺産となる建屋を大切に、更に地域の活性化に繋げているかと言えば、行政の積極的な関与が足りていないと感じた。建屋は雨ざらしで、今にも朽ち落ちそうな状況にあり、誰でも、その施設内に入れる環境。周りには、民家もあり生活下の元に施設があり、決して大切に管理されているようには思えなかった。また、世界遺産として、観光の目玉としての活用もされておらず、世界遺産を持つ他の行政とは異なっていた。富士山を世界遺産として持つ富士宮市の取り組みとは、大きな違いを感じた。大牟田市だけでは経済的に難しいのであれば、福岡県などにも協力をもらい、世界遺産としての価値を見出して欲しい。三池税関支署、三池港は、近代国家に向かう中、その周りは、多くの人が集い大変賑わっていたことが伺えた。税関は

石炭を輸出する為に、事務手続きをする施設として 1908 年に作られ、当時としてはハイカラな洋館であった。今の建屋は 2012 年に建て替えられたものとなるが、石炭輸出が盛んにおこなわれていた時代には、多くの外国人が訪れていたと聞いた。残念なのは、この施設でもやはり、周りには観光と繋がる行政対応はされておらず、世界遺産を活用しきれていないことが挙げられる。

三池港は石炭輸出の為に、「團琢磨」により築かれた港であるが、単に石炭輸出専用港を目的としたものではなく、その先、石炭が衰退するであろう後の 100 年後も産業発展の港として残るように、考え作られて築港されていた。将来を見据える眼力が大事であると感じた。今で言えば、目先の業績に捉われがちな企業経営者が多い中、先を見据え、地域や社会などを大局観で捉え、この先 100 年を考えられるリーダーの必要性を痛感した。

与論長屋で驚いた事は、現在も人が住んでいる、また、寄合所なども使用されていることにある。与論長屋は世界遺産ではないが、石炭採掘をする為の安い労働力として、与論島から連れて来られた人達の住まいであり、崩れ落ちそうな住居であった。当時、与論から来た人達への差別、偏見が酷く、虐げられた存在であったことを知った。今に繋がる社会問題が、その与論長屋から見て取れると感じた。現在も安い労働力を求め、非正規社員が増え続けている。世界的に見れば、コロナ禍の中、アジア人への差別、日本でも学校内でのいじめなど、過去からある問題が、今でも、形を少し変え続いていることに問題の深刻さ、根深さを感じた。

三池炭鉱三川坑跡では、三池争議、三池炭鉱炭塵爆発事故の話を聞く。最初に手渡された資料は大牟田市の三川坑の歴史を伝えるものだったが、ボランティアガイドからは、三池争議や爆発事故の負の話を主に聞くことができた。三池争議は、三井三池炭鉱労働者による労働争議で、1959 年石炭産業斜陽化に伴い、三井鉱山労働者 1 万 2 千人に対し、6000 人の人員整理を計画、希望退職を募集したが計画人員に満たず、会社は 4580 人の解雇を含む整理を強行した。労組はロックアウト、全面ストライキに入り、翌年、組合内が争議強硬派の第一組合と会社との同調を考える第二労組とに分裂した。また争議中には、暴力団員が第一組合員を殺害する事件も発生し、第一組合は、日本労働組合総評議会の支持を受け、会社は多数の警察官を導入することで、激しい衝突が起きた。その後、中労委の斡旋により解雇を自発的退職にするなどの条件で争議は解決するも、その後、石炭事業は衰退し、2004 年炭労は解散、国内から炭鉱労働組合が消えた。労働組合の委員長として感じることは、当時の過酷な労働環境、過重労働、低賃金などは当たり前、労働安全対策も講じられず、体を壊す労働者も多く、労働者は使い捨てであった。今、言われる株主と共に労働者は会社のステークホルダーの一員であるというような考え方は存在しない。現在ある労使関係や労働条件や処遇は、過去の先人達の尊い犠牲の中で、築き上げ得られたものであると痛感した。この争議は、国策であるエネルギー事業の転換（石炭から石油へ）の下、国策に左右された状況下であり、日本中を巻き込んでの争議でもあった。今のナショナルセンター連合も 31 年となるが、考え方は、左翼的思想は少数派となり、会社の発展と共に労働者の処遇を向上させていくような考え方が主流となっている。これには、企業も労働者も、この大きな犠牲や代償を払い、学んだ事が今に繋がっているものだと感じる。

三池炭鉱炭塵爆発事故は、1963 年に発生した炭塵による粉塵爆発事故で、死者 458 人、一酸化炭素中毒患者 839 人を出す悲惨な炭鉱事故である。労災災害事故となった原因としては、三池、三井炭鉱は、それまで、炭塵爆発などの事故がなく、安全に対し過信していた部分があったと聞いた。また当時は労働安全についても軽んじられていた。石炭産業が斜陽産業化しており、安全に対して経費を掛ける余裕も無かったと思われる。この事故を機に日本の炭鉱が閉山となるきっかけとなった。これを現在に置き換えて言えば、今の企業は、労働安全衛生対策は勿論、社内不祥事やガバナンスが効かない企業は社会から淘汰される状況となっている。当時の悲惨な体験から学んだことが、今に活かさ

れていると感じる。話は余談ではあるが、ガイドからは、自身の両親が炭鉱労働者であり、４～５キロ先の自宅にまで爆破音が聞こえたと、当時の状況を伝えていた。ボランティアガイドとしては、三池炭鉱への強い思いの中、自身の考えも含め話をしてくれていた。

●北九州市エコタウンセンターを視察

エコタウンセンターでは、所謂３Ｒ（リデュース・リユース・リサイクル）の関係ではなく、今回は次世代エネルギーについて、特に風力発電の講義を受けた。昨今、世界規模で二酸化炭素排出の削減目標が設定され、日本も 2050 年には、二酸化炭素排出量ゼロ社会を目指すことが宣言された。その為、各行政や企業に課せられたことが、カーボンニュートラルの取り組みである。その中、この北九州市は最先端を行く地域となっている。行政、大学、民間企業がコラボし、それぞれの役割を果たし、売電収益を確保しながら風力発電を事業として成り立たせていることに驚かされる。ただし、この進んでいる事業を他の行政にも同じ様に展開するとなると難しいところもある。風力発電では低周波の騒音問題もあり、地域住民の反対運動や設備にコストが掛かる、売電料金が安く設定されている。自然相手だけに、安定した電力発電にも課題があり、それらの問題をクリアーしないといけない。他の行政機関や民間企業で、ここのノウハウを活かせるかと言えば課題も多く、安易にできることではない。北九州市は元々、石炭などのエネルギー供給地域として発展してきた歴史と、埋め立て地に風力発電施設を多数配置しており、人が住んでいないことで、低周波問題の反対などもなく、また安定的に風が起きる環境でもあり、更に九州電力や地域企業、大学までもが協力する姿勢の中、しかも 20 年に渡る歳月を掛けながら、今に至っている訳で、早々にできる事業ではないと感じた。今後も更に海上に風力発電設備を増やしていきながら、北九州市全体の電力を風力発電中心に太陽光発電と併用しながら 100％受給を目指している。ただし、課題としては、この電力を全国に送電することを想定した場合は、九州から本州に渡る送電線を網羅して行くことに課題があると思うが、2050 年に向け、全国で北九州市の取り組みを活かしながら、二酸化炭素ゼロの社会を目指していくこと、その気概が大事であると感じた。

最後に、今回視察研修した近代産業遺産や次世代エネルギーを通じ、過去があって現在が構成され、現在があるからこそ、未来が創造されるものだと感じることができた。過去の教訓や体験から学んだことで、現在の法律、制度、コンプライアンス、モラルやマナーに至るまで影響を受け変化してきた。過去から現在が構成され、現在から未来が創造される。北九州の石炭をエネルギーとして採掘していた歴史から、現在のエコエネルギー産業に繋がり、過去の痛い経験や過ち（争議、炭塵事故、差別）から学び、労働安全衛生の取り組みや企業と労働者の関係性、差別問題など、変えるべきことが生まれ、それが今に反映されて、更に、その今の出来事が有って、未来に繋がるのだという事を実感した研修であった。

副会長	富士宮市職員組合・執行委員長	坪井　真司

今回の視察研修は、労働闘争の歴史や環境問題をテーマとしていたため、自身もその点に着眼点を置き視察に臨んだ。

三池炭鉱では当時の施設を見学し、まずその規模の大きさに圧倒された。そして、今のような機械もない時代、人の手を中心に作業した結果であることに改めて驚かされた。当然作業員には多大なる苦労があったろうが、現代のように労働者の権利など補償されず、文字通り馬車馬のように働き経営者側に搾取される時代であったことに憤りを覚えた。しかし、ある意味で当時はそれが当たり前であり、その当たり前を打破すべく労働争議に乗り出したことは当然であると思う。手探りの争議の中で、暴力的な手段も取ってしまったことは今の感覚では残念に思うが、こういった事実も経て今の労働者の権利が保障される時代になったと考えると目をそらしてはいけないものである。

北九州エコタウンセンターでは次世代の再生可能エネルギーとして期待される洋上風力発電の仕組みと展望について学んだ。再生可能エネルギーの普及が叫ばれてしばらくたつが、個人的には太陽光発電以上に期待を寄せたいものと感じた。2010 年代の太陽光発電ブームで、小規模施設なら個人でも設置しやすいことから日本全国に太陽光発電設備が林立したが、その後適切な管理がされず遺棄されたものや、反射光などで地元とトラブルになった事例も聞く。また、富士宮市においては富士山の景観を守るために大規模設備の設置を規制するなど、太陽光発電は自然との共生に課題を感じる。もちろん洋上風力発電においても海洋生物への影響や漁業関係者との調整など課題も多かろうが、太陽光発電ほど個人が参入する余地がなく、産官学が連携し適切な計画・管理をすることでより持続性の高いものになると感じた。

今回の研修では過去の歴史・未来の技術を学んだため、現代の我々が何をすべきかを改めて考え、今後の活動に生かしたいと思う。

事務局長	ニッピ労働組合・中央執行委員長	飯室　憲一

福岡県の世界文化遺産である三池炭鉱、宮原坑跡と三川坑跡を現地ボランティアガイドに案内していただきました。明治時代、良質な石炭を採掘するにあたり過酷な労働を囚人に強制していた事実や、昭和に入りさらに採掘の場を広げ、そこで起きた三池争議の第 2 労働組合誕生や流血事件の実態を、当時父親が働いていたというガイドの方の話を聞き、時代の光と影を感じることができました。

三池炭鉱は日本の経済を支えたエネルギー産業ですが、当時は人権侵害が当たり前の時代であり、昭和に入り労働組合が誕生した後もその流れは変わることなく、労働者を苦しめてきた背景を知ることで、建造物や掘削方式の遺産だけではない、人が人であり平等に扱われなければならないこと、それが現代の労働者の立場でも決してできているとは言えない事実に、労働組合に関わる者として心に突き刺さる想いでありました。世界遺産である施設は風雨に晒され朽ちていきます。形あるものを補修していく事は大変なことですが、もっと大切である炭鉱に関わる方たちが語り継ぐ労働者の歴史を、地元の方たちが残してくれることを願わずにいられないと感じました。

また、翌日には町をあげてエネルギー問題に取り組む北九州市の次世代エネルギーパークを見学させていただきました。北九州工業地帯は四大工業地帯として鉄鋼業が盛んな地域で、前日に見学した炭鉱とは深く関わりがあって、日本の経済を支えた重要な場所ではありますが、過去には公害で悩まされた場所でもあったことは忘れてはいけません。そこに行政が中心となり出資会社を集め一部地域を陸上・洋上風力発電やバイオマス発電、太陽光発電、高効率の火力発電の施設を設けモデル地域としてカーボンニュートラルを進めている場所となっていますが、見学の際に河口の向こう岸で製鉄所のコークスを燃やす真っ黒な煙を見てしまったこともまた事実です。近い未来に脱炭素社会を実現していく事は決まっていますが、エコと一方で経済のための公害が混在するこの景色は問題であり、さらには国が目指す 2050 年のカーボンニュートラル社会は、原子力発電を維持したうえでの目標であることも大問題です。

幹　事	ダスキン富士宮互助会・前幹事長	佐藤　英子

今回の視察研修は、過去と未来のエネルギーについての考察でした。

まず、2015 年に世界文化遺産に登録された大牟田市の三池炭鉱「宮原坑」他構成資産の視察です。明治から日本の産業革命における石炭エネルギーの供給源として、三池炭鉱の果たした役割は大きく、開坑から閉山まで 108 年、日本の近代化に多大なる貢献を果たしました。その過程においては、特に初期、過酷すぎるとも言うべき、劣悪極まりない労働環境、人権もなにも無い、人を人とも思っていないそんな中で、24 時間フル稼働で、強制労働させられた刑務所の 1000 人以上の囚人や、差別

を受けながらも働き続けた与論島からの移住者達、そんな多くの人々の犠牲の下に成り立ったものでした。また、太平洋戦争時には、さらにあらゆる人々が三池炭鉱に集められました（日本人、朝鮮人、中国人、オーストラリア人捕虜）。その後、高度成長期には、石炭から石油へのエネルギーシフトの影に、三池炭鉱では 1200 名以上の指名解雇をはじめ、これを受けた日本で最大の労働争議（三池闘争）となり、さらに戦後最大の鉱山事故（三川坑爆発事故）が起きました。爆発事故では、死者 458 人、重傷者 458 人、一酸化炭素中毒で苦しむ 839 人の労働災害を出しました。

この 130 年あまりの歴史を顧みると、今日私たちがこうして生活できる事に感謝あるのみです。そして今あらためてエネルギー問題を考えると、東日本大震災時には原子力発電の賛否があがり、脱原発が叫ばれました。近年、気候変動に伴い、多くの災害が世界中を襲っています。その原因となる「温室効果ガス」、その排出量をどのように減らしていくかについては、個人としても考えなくてはなりません。日本政府も、2050 年までのカーボンニュートラル実現を宣言していますが、脱炭素社会の実現は可能なのでしょうか。私たちは、家庭での電力、ガスの使用や、ごみの排出から始まり、自動車等、様々な活動を通して温室効果ガスを排出しながら暮らしています。どう減らすことができるのか…。

そこで、次世代を担う自然エネルギーについて北九州市にある次世代エネルギーパークの視察です。広大な埋め立て地にエコタウンセンターをはじめエネルギー関連の企業や大学が革新技術の研究に取り組んでいます。風力発電、太陽光発電、バイオマスを利用した再生可能エネルギーと。敷地には、太陽光パネルが敷き詰められ、陸上風力発電機が十数基、洋上風力発電機が 1 基。あと数年でこの響灘の洋上に数十基の洋上風力発電機が完成するそうです。低炭素社会の実現に向けた取り組みを、北九州市のみならず、他の地方自治体も参考にして取り組みが進められることを期待します。

今回の視察研修で約 30 年関わらせていただいた労福協の活動に終止符を打ちます。今まで様々な学びを戴き、心より感謝申し上げます。

幹　事	ホールアース互助会・事務局長	山崎　宏

視察初日は三池炭鉱に関わる産業遺産を訪ねました。明治から昭和初期まで採炭されていた「宮原坑」や、三池港の海外貿易において重要や役割を果たした「旧長崎税関三池税関支署」は、それぞれ住宅地や海沿いの工場地帯に残存されていました。施設や敷地は思っていたよりも小さく、専用の解説施設が敷設されているわけではないため、私たちのみで立ち寄っただけでは、遺産の背景や価値を理解することは難しかったと思います。その意味において、ガイドさんが帯同してくれ、わかりやすい説明をしてくれた点が非常に有意義でした。特に、「三川坑跡」で、労働争議と労働災害の歴史において共に“戦後最大”と称される「三池争議」および「炭塵爆発事故」について、地元出身者ならではの視点も交えながら丁寧に語ってくれたことが印象的でした。ガイドさんの話から、社会は絶え間なく変化していること。そして、その変化の渦中には必ず働く人々がいて、公平性や安全性を保つために汗を流し続けていること。平成そして令和の時代になり、多くの人々の努力で働く環境は改善してきているが、常にその視点を大切にしなければならないことに気付かされました。

研修二日目は北九州市エコタウンセンターを訪ねました。初日も“エネルギー”がテーマになっていましたが、この日は未来のエネルギーについて考えるきっかけをもらいました。脱炭素社会の実現に向けて、自然エネルギーを効果的に活用していくことは避けて通れない道だと思いますが、北九州市は地理的な特徴を踏まえながら次世代エネルギーのあり方を提示している自治体だと感じました。特に印象的だったのは風力発電の推進です。風車の部品は 2 万点を超えるとのことで、産業としての裾野が大きいことが伺えました。今後設置が進む洋上風力発電の関連施設を含め、この分野を支えるあらゆる技術が北九州周辺に集積しており、すでに地域産業の礎になりつつあるようです。低炭素型の

エネルギー供給と地域産業の進展を同時に達成させる取り組みとして注目していきたいと感じました。一方、風力発電施設の設置については、全国各地で生態系や景観、漁業との共存などの観点から難しい判断が求められています。改めて、日本のエネルギーミックスはどうあるべきか、大きな風車の下で考えさせられました。

今回の研修では、社会が大きく変化するタイミングでのエネルギー産業を取り巻く労働、安全、環境などについて、ガイドさんや労福協メンバーとともに知見を深めることができました。すべての関係者に心より感謝申し上げます。

視察レポート①　世界文化遺産　三池炭鉱

早朝に富士山静岡空港を飛び立つと、わずか 2 時間後には福岡空港に到着しました。

初日は 2015 年にユネスコの世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」に登録された三池炭鉱に関わる施設を見学しました。三池炭鉱は福岡県南部、有明海に面した大牟田市に位置します。「宮原坑」→「旧長崎税関三池税関支署」→「三池港」→「与論長屋（産業遺産群には含まれない)」→「三川坑（世界遺産には含まれない)」の順に、移動をしながら、それぞれの施設の歴史的意味や価値などを、大牟田観光ボランティアガイド境様の手製の資料を用いた丁寧な説明のもとで確認していきます。

明治から昭和にかけて「黒いダイヤ」とも称された石炭採掘を巡っては、日本の産業革命のエネルギー供給源としての重要な役割があった一方で、その裏にあった「囚人労働」や与論島などからの「移住者労働」など危険・過酷・人権侵害的な労働実態等、暗部の歴史についても学ぶ機会となりました。

宮原坑第二竪坑跡

ガイドさんより詳細な説明を受けます

施設内も見学可能です

三池税関支署は資料館となっています

三池港では石炭運搬について学びます

今も利用されている与論長屋

労働者に関わる者が「三池炭鉱」の名を聞けば必ず思い出される「三池争議」と「炭塵爆発事故」。いずれも“戦後最大”の労働争議、労働災害と言われています。三川坑跡に関わる近代化産業遺産の資料の

中ではわずかに触れられているのみのこの２つの事件についても、炭鉱労働者（旧三池炭鉱労組所属）の子息であるガイドさんから、当時の様子も含め解説いただきました。石炭産業が斜陽化する中で経営の悪化による人員整理を発端に、「総資本対総労働の対決」と呼ばれた三池争議も、暴力団の介入など過激化を経て最終的には労使融和の方向で収束することになります。また、過去に炭塵による事故が発生していないことを過信して企業が労働者の安全を軽視し、コスト削減に傾斜する中でトロッコの部品交換を怠ったことが招いた爆発事故は、結果として三池炭鉱の閉山を早めることに繋がりました。いずれも石炭という一つの産業の盛衰の中で起きた出来事ですが、当時に思いを巡らせる中で、現代に至る労働者の就労環境の改善などに与えた影響は多大であったと、あらためて考えさせられました。

炭塵爆発事故は斜坑奥で発生

炭鉱施設も徐々に朽ちていきます

労働史上の重要な舞台にて

視察レポート②　北九州市エコタウンセンター

２日目は北九州市エコタウンセンター（次世代エネルギーパーク）を視察しました。1 日目で過去のエネルギー産業を学び、2 日目は近未来のエネルギー事業について学ぶことになります。

まずは、北九州市エコタウンセンターにて北九州市が進めるエネルギー政策の説明を受けました。経済産業省が認定する全国 66 自治体のエネルギーパークのうち、北九州次世代エネルギーパークは 2007 年に第一号認定を受けています。響灘（北九州市北部）に面するパーク内には、十数基の風力発電の風車、太陽光発電施設、バイオマスによる再生可能エネルギーなどが集まり、国内最大級の再生可能エネルギーの集積地となっています。これだけの規模になるまでには、産官学による連携と 20 年以上の継続した政策があったとの解説を受け、一朝一夕に出来上がるものではないとあらためて考えさせられます。また、2025 年に向けては響灘に多数の 200m級の洋上風力発電施設を設置する計画が進められており、政府が進める 2050 年の「カーボンニュートラル（脱炭素）」に向けた革新的な取り組みが進められていました。クリーンエネルギーは、ＳＤＧｓの 17 の目標の１つであると同時に、今後の私たちの暮らし方にも大きく関わります。講義の後には、財源（売電による収支）、産業としての広がり、送電設備の問題、騒音問題や住民理解、漁業や自然環境との調和など、様々な観点での質疑や意見交換をさせていただき、地域の特性を十分考慮しながら進められている事業であることが理解できました。

事業全体像の説明を受けます

エネルギーパーク内の資料館

化石燃料の地球環境への影響

施設内での学習の後には屋外に飛び出し、実際に風力発電施設や太陽光発電施設の間際で見学をさせていただきました。遠くに見えた陸上風力発電のプロペラも、真下まで足を運ぶとその迫力に圧倒されます。数年後には洋上風力発電のプロペラが並ぶ響灘を眺めながら、１基で２万点以上とされる風力発電施設の部品数や日々のメンテナンス等も考えれば、洋上に広がる発電施設が、産業としての裾野の広がりも期待できるものであることが実感できました。また、工場等の間に太陽光発電パネルが一面に広がる光景を見ながら、次世代エネルギーパークは埋め立て地で初めからエネルギーの集積地として整備が進められているため、民家の建築ができないようになっており、住民との大きな軋轢を生まずに事業が進められていることが理解できます。再生可能エネルギーの事業としての将来展望を早い段階で認識し、収支を含めた事業性や環境負荷などを分析、これに沿って事業者や大学などともしっかり協力・連携して政策を進めなければ、一貫性があり持続性がある取り組みとしての定着が難しいことを学ぶことができました。

響灘沿岸に立ち並ぶプロペラ

洋上施設の計画の説明を受けます

太陽光パネルの設置状況

今回の視察研修では、石炭から再生可能エネルギーへの移り変わりを通じながら、その裏側にあった労働者を巡る厳しい歴史や、あるいはエネルギー政策の長期的な視点などを学ぶことができました。特に今後のエネルギー政策は、各地域特性に合わせて進められるものである必要があります。また、事業を進める上では雇用の創出なども期待できる可能性があります。これらの観点について労福協としてもさらに理解を深め、行政への提言活動などに役立てていきたいと考えます。

あらためまして、今回の視察研修にて丁寧なご説明・ご案内をいただきました、大牟田観光ボランティアガイドの境様、北九州市エコタウンセンターの松井様に感謝を申し上げますとともに、ご参加いただきました役員のみなさま、大変お疲れ様でした。

（研修報告担当　事務局次長　佐原）